

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 渡部良子

前近代のペルシア語文化圏では、知識人や宮廷に仕える書記が手紙や文書を記す際、一定の書式に従い、美辞麗句を連ねた独特の技巧的な文体が用いられた。この書式や文体の指南書や模範例を集めた書はしばしばインシャーと呼ばれるが、本論文は、一連のインシャー作品の内容を分析することによって、13-14世紀のモンゴル支配時代におけるペルシア語圏の知的エリート社会とその文化の特徴を論じている。著者がとりわけ意を用いているのは、技巧的な書簡や文書の起草技術が必要とされた社会的・文化的背景を明らかにすること、この技術が時代の変化に伴ってどのように継承されてゆくのかを示すことである。

第一章では、現存する最古のペルシア語インシャー作品(12世紀)の内容が紹介された後、13-14世紀のモンゴル時代については、写本も含め15点の作品の情報が整理され、書式や文体の発達の様相や編纂の背景が説明される。この章の書誌情報は網羅的で、従来参照されていたイラン人学者による情報の誤謬や欠落を相当程度指摘しており有益である。第二章では、インシャー術指南書の冒頭部に記される書簡受取人と差出人の地位の差の表現が詳細に検討され、この部分がいかに正確に両者の力関係を表すよう工夫されたかが明らかにされる。続く第三章では、書簡受取人と差出人の身分秩序である「位階」の概念が、モンゴル支配の政治的・社会的変動の影響をどのように受けたのかが議論される。第四章では、イルハン朝の政治権力者であるラシードディーンの手紙集にあらわれる「位階」表現を材料に、この著名な政治家がその周囲の人物たちとどのような政治的・社会的人間関係を取り結んでいたのかが検討される。最後の第五章では、近年我が国で進展がめざましい大元ウルスの文書行政研究の成果を利用しながら、モンゴル支配期にも、原則として伝統的なペルシア語文書起草術が継承されたこと、しかし、表現や文書作成法の随所にモンゴル命令文書式の影響が見られることが明らかにされる。

その文体の難解さゆえに、従来歴史研究に十分に活用されることのなかったインシャー作品を本格的に用い、モンゴル時代のイラン高原における知的エリート社会とその文化の一端を明らかにした研究として、本論文は大きな価値を有する。むろん、その先駆性ゆえの弱点がないわけではない。例えば、どの範囲の作品にまでインシャーという術語を適用するかという点にはなお議論の余地があるし、ラシードディーン手紙集の真偽論争の展開に今ひとつの配慮が必要だったろう。注の引用やアラビア文字の転写にもさらなる厳密さが要求されよう。しかし、総合的に判断して、本論文が高度な文献学的知見に裏打ちされた独創性を備えていることは間違いない。よって、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するとの結論に達した。